

3～5歳異年齢混合児を対象としたオンライン表現活動の実践 《しずくのぼうけん》 ～ふしぎふしぎほんとに不思議!!!を通して～

【報告者】

(出演者) 中井遼海 永野佑奈
(人形操作係) 石橋美咲 片山ありさ
(音楽係) 川崎歓花 西口
(カメラ①・②係) 西田望美 井手口麻奈加
(脚本/カメラ③・切替係) 松永佑華 宮田桃華
(ジオラマ・実験係) 井手千夏子



1.テーマについて

・テーマ

この世の中にあふれている不思議

・テーマの選定理由 (永野)

- ・いのち、水、言葉、宇宙、空についての巡り合いを考えるきっかけになればいいなと思った。
- ・自分の身近な所に多くの不思議が存在し、その理由を感覚で感じながらわかって欲しいと思った。
- ・不思議を分かりやすく伝えてたいと思った。

・内容を定めるまでの経緯 (永野)

子どもたちは、私達大人が想像もつかないような驚きの視点で様々な不思議を見つける。その中から、1つの不思議に絞り、不思議を詳しく知っていきながら、分かりやすいようにすることを理由とした。

まず、テーマ設定後、メンバー全員で、世の中にある不思議を具体的に挙げていった。その中で、どの不思議に注目して子ども達に伝えるのか、どのようにして不思議を表現するかなど、「不思議」というテーマは決まったものの、多くの意見が挙がり、まとめるのに時間がかかった。最終的に「水の不思議」を伝えることにした。

次にどのように表現するかを話し合った。絵本を題材にするのか、脚本を考えるのかを決めていった。

子どもに親しみをもってもらいたいので、ふしぎ探検隊になりきれのような役割を設定して表現することにした。

・あらすじ

「ふしぎふしぎほんとに不思議」をテーマに、2人の学生にて水の不思議を内容としたあらすじを考えた。そのあらすじを基に水の不思議のどの場面を取り上げるか、どのように表現していくかをメンバー全員で話し合いながら作り上げていった。

2.物語と脚本について(松永)

【物語のあらすじ】

冒険をすることが大好きなゆうくんは、ある日雫の世界に迷い込んでしまう。そこで出会った ゆわちゃんとともに、雫に変身して雫の世界を冒険する物語。

【参考文献】

・絵本「しずくのぼうけん」(作者：マリア・テルリコフスカ・出版社：福音館書店)

テーマを決めたあと、学校の図書館にて参考にする絵本を探した。どのような不思議にするかまだ未定だったので、複数の絵本を選び、表現方法も話し合いながら中身を決めていった。物語の流れが決まったあと、実験をどのような形で進めていくか考えながら、台詞も考えた。テーマ自体が幼児にとっては少し難しいものだったので、いかにやさしく、伝わる言葉で物語を作るかの言葉選びや否定しない言葉掛けに苦労した。脚本係だけではなく、メンバーや先生と話し合いながら脚本の添削を行った。子どもたちとの掛け合い(変身!の掛け合いや質問)も交えられるように工夫した。けれど、本番まで1週間切ったとき、所要時間20分に対して、台本が長すぎるということが分かった。そのため、計画性を持つことや登場人物が話す速さや実験への配慮を考えていきたい。

実験の内容が決まらず、台本の完成が本番当日まで持ち越してしまったので、全体の流れの把握が上手く伝わっていなかった。特に、雫の実験のところをどのような意図で子どもたちに伝えるかについての話し合いが続き、形になってから本番までの時間も少なかったため、人形をどのように動かすのか、どのようなカメラワークで抜くのかの話し合いを全体ですることが出来なかった。これらのことから物語のテンポや間に余裕のある台本を書きたい。また、出演者とプロジェクターを対面する立ち位置にすることで、出演者も子どもたちの表情を横目で見ることなく把握出来たのではないかと考える。

【物語の内容】

《オープニング・雫の世界へ迷い込んだゆうくん》(人の姿)

ある日、いつものように冒険に出かけたゆうくんは、たくさんの雫に囲まれた不思議な雫の世界に迷い込んでしまう。そこで雫の世界に住む ゆわちゃんと出会い、雫の世界の冒険が始まる。

《雫に変身》(ろ過実験)

雫に変身したゆうくとゆわちゃん。どろどろに汚れた水たまりのお水がどうやって綺麗になるのか、『ろ過装置』を使って実験する。本番では1回では透明で綺麗なお水にならなかったが、何度も繰り返すことで透明なお水になることを伝えた。ここでゆうくんは砂のトンネルを通ることでお水が透明で綺麗になることを発見する。

《山から川、そして海へ》(ジオラマ)

山に降った雨が川になり、大きな海になることをゆうくんは知る。実際にジオラマにペットボトルとジョウロを使い、雨に見立てて水を流す。(カメラのブレで酔わないように配慮)。雫が山から海へ流れたところで、ゆわちゃんからまだ冒険が終わっていないことが伝えられる。

《海から雲へ》(線香の煙)

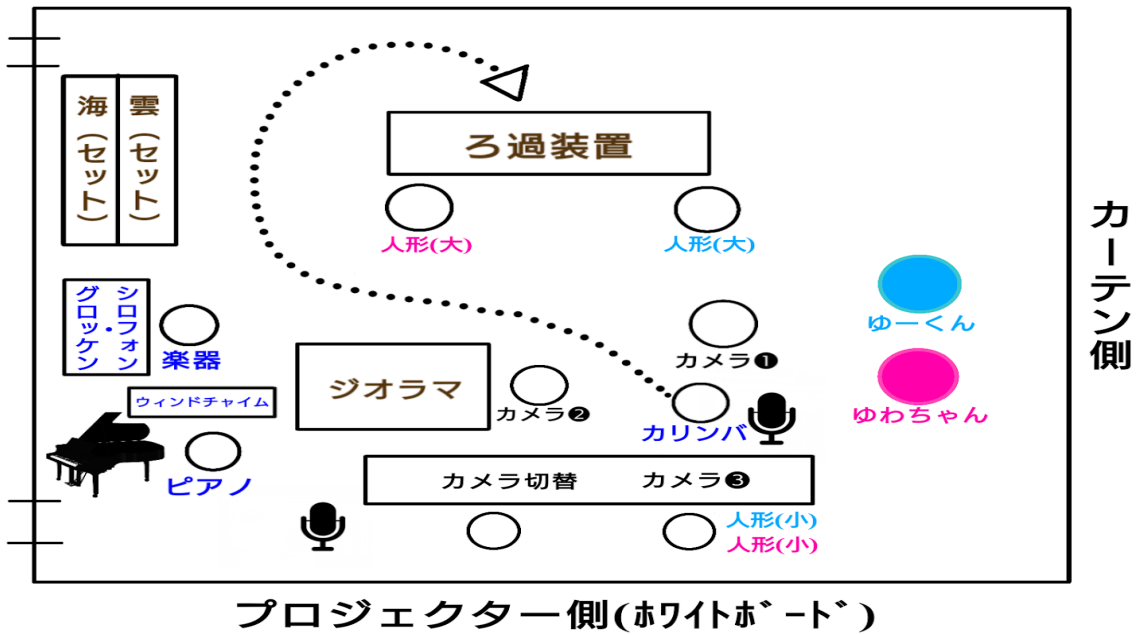
どうやって雲になるのか楽しみなゆうくん。太陽に温められた2人は、水蒸気になり、空へ浮かんでいく(線香の煙)。そして、真っ白で大きな雲に変身する。すると、だんだん雲は黒くなり、2人は雨となって地上へと落ちていく。ゆわちゃんと冒険を振り返りながら、雨が降るのが楽しみになるゆうくんの姿がある。

《エンディング・元の世界へ》(人の姿)

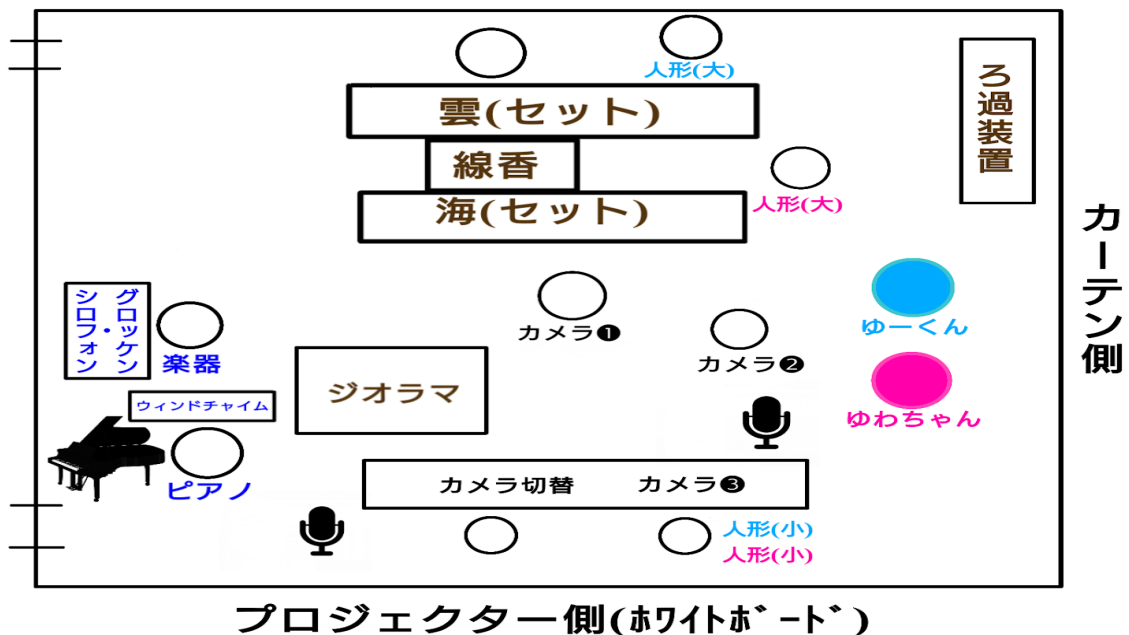
2人は元の姿に戻る。ゆわちゃんから、次は、東山愛児園のお友達のところにも遊びに行くかもしれないからその時は一緒に冒険しようとする。ゆーくと東山愛児園のお友達とお別れの挨拶をし、物語が終わる。

《見取り図》(1409教室)

●オープニング



●エンディング





3.場面ごとの演出の工夫（永野）

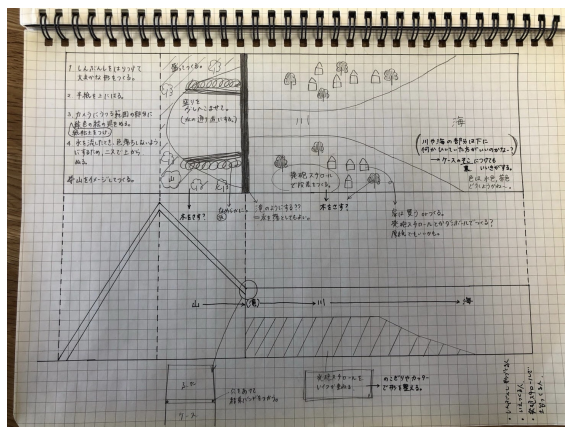
まず、水の不思議についてどのような導入にするか、どのような内容に入っていくかを考えた。例えば、水は様々な形に変化している。霧、水、雨、川、海、雲などがあがったが、それをどう伝えていくのかを表現するのがとても難しかった。そこで、絵本からヒントをもらったりインターネットで調べたり、先生に相談しアドバイスをもらいながら考えていった。

リアルタイムで実際に水の流れを表現したいと思った。また、表現している時に、より子どもに親近感を持ってもらいたく、人間として伝えるよりも人形など子どもが受け入れやすい形はどうかと考えた。

①水の流れについて（井手）

・ジオラマ 参考資料:https://youtu.be/szr_uW-tYAY

- ・リアルタイムで実際に水の流れを表現する為には、山から海にかけて川が流れるジオラマを作成することが最適だと考え、ジオラマを制作することに決めた。
- ・ジオラマを使用した実験を通して、山に降った雨は何処へ行くのか等、身近に存在している水が循環している仕組みを視覚を通じて、子ども達に分かりやすく伝えたいと思った。
- ・最初にジオラマの設計図を描き、完成形のイメージを皆で共有した。
- ・ジオラマの基礎となる部分にはベッド下用の収納ケースを使用した。収納ケースの蓋は結束バンドで本体の方に固定し、山と平地の高低差を表現した。
- ・山となる部分（収納ケースの蓋の上）は水で濡らした新聞紙を凹凸が出来るように敷き詰め、その上から半紙を貼り重ねた。しかしそれだけでは強度が心配だったため、少量の水で溶かした木工用ボンドを満遍なく塗り補強した。





・ボンドが完全に乾いたら、本物の山に近づけるため、半紙をアクリル絵の具で緑色に塗り、細かく切った乾燥苔を貼り付けた。川となる部分は水色に色付けた。当初は、実際に水が流れる部分にのみ水性ニス塗る予定だったが、貼り付けた乾燥苔が直ぐに剥がれ落ちていたため、水性ニスは全体に塗るよう予定を変更した。

・山を流れる川と、その下にある平地を流れる川が違和感無く繋がるよう注意しながら滝の制作を進めた。

・平地の部分（収納ケースの中）の土台には、発泡スチロールを切り重ねた物を使用し、川との高低差を作った。最初は、地面となる発泡スチロールをアクリル絵の具で茶色く着色していたが、色ムラができ、時間が掛かるということで茶色の画用紙を両面テープで貼り付ける方法に変更した。



・茶色の画用紙を貼り付けただけではリアルさが足りなかったため、本物の石や土で画用紙を覆った。しかし、ただ置いただけでは直ぐにこぼれ落ちてしまうため、水で溶いた木工用ボンドや糊スプレーを使用して固定した。

・平地を流れる川は灰色の画用紙を使用した。また、吉柳先生のアドバイスを受け、水の反射を表現するため画用紙の上に板寒天を配置した。画用紙は水を弾かないため水性ニスを塗り補強した。

・ジオラマの背景には黄緑色の模造紙を使用した。また、収納ケースが透明で左右が透けて見えてしまったため、収納ケースの側面に黒色の画用紙を貼ることで対応した。

・実際にカメラリハーサルを行ってみると、カメラでジオラマを撮影する際に、収納ケースの右側面が邪魔だということが分かった。収納ケースはプラスチック製で自分達で加工することが難しかったため、恒賀先生のご協力の下、カセットコンロで加熱した丸棒ヤスリやノコギリを使用して加工した。



・前日のリハーサルの時に実際に水を流してみたところ、何箇所か壊れてしまったため、発表当日の朝は修復作業をしないではいけなくなりました。ジオラマの見た目ばかり気にしていたが、耐久面にもしっかりと配慮する必要性を感じた。

②人形の表現について（西田）



- しずくの冒険にちなんで人の姿だけではなく、実際にしずくの世界に入ったと感じさせるようにする為に、人からしずくに変身をするとともに本当のしずくになる表現を取り入れたいと思った。
- 色に関してはそれぞれの好みの色にした。ゆうくんの人形は西田、ゆわちゃんの人形は片山が担当した。
- ゆうくんは何も知らない状態でしずくの世界に入り込んでいるので知らなかったことに対して驚きを表現するために、ゆうくんのみ表を通常バージョン、裏は驚いている表情バージョンを取り入れた。（大小2つ共）



- フェルトと綿、刺繍糸を使って製作をした。小さいバージョン、大きいバージョンに分かれてそれぞれ一つずつ製作した。
- 小さいバージョンは手元に持ちやすいよう下に割り箸を取り入れ、大きいバージョンは上で持つので頭の方に曲げやすく調整がしやすいよう、ストローを取り入れた。
- また、腕と足が黒色で背景が同じ色で見えにくいと考え、フェルトの色に合わせた刺繍糸で腕と脚に巻き付けた。



③雲の実験について(松永)

・子どもたちに海から雲になる様子を伝えるために、Ⅰ.綿を吊るす Ⅱ.泡にヘリウムガスを注ぎ浮かばせる Ⅲ.お湯を沸かして湯気で表現する Ⅳ.ドライアイス Ⅴ.割り箸に火をつけ、その煙で蒸発を表現する の5つの案が出た。

Ⅰ.綿を吊るす

・綿を雲に見立てて糸で吊るし、割り箸などで海から上に持ち上げるという案が出た。しかし、海からそのままの雲が出てきており、不自然ということになり却下となる。代わりに綿を背景(ダンボール)に貼り付けることで、出来上がった雲を表現した。

Ⅱ.泡にヘリウムガスを注ぎ浮かばせる

(参考動画)「SUSHI RAMEN」(<https://youtu.be/ZudzwVHMylY>)

・恒賀先生に相談し、参考動画を紹介していただく。実際に洗剤を溶かした水に、ヘリウムガスの代わりにのりスプレーを代用。しかし、うまく泡が立たず、動画のように大量の泡を発生させ浮かばせることは出来なかった。また、実験のインパクトは大きいですが、綿を吊るすときと同じで、海から雲がそのまま出てくると不自然とのことで却下になる。



Ⅲ.お湯を沸かして湯気で表現する

・カセットコンロに鍋を置き、お湯を沸かして湯気で水蒸気を表現する案が出た。しかし、湯気が見えにくいこと、お湯を沸かすのに時間がかかること、火を取り扱うので危ないということでも却下になる。

Ⅳ.ドライアイスの煙で表現する

・ドライアイスの煙で蒸発を表現する案が出た。二酸化炭素なので上ではなく下に行くのではないかという意見が出たので団扇で仰ぐことになった。しかし、ドライアイスが販売されている場所が遠く(朝早く開いていない)、保管方法が難しい問題、本番までに溶けきらず残っているかという問題により却下になる。

Ⅴ.割り箸に火をつけて煙で表現する

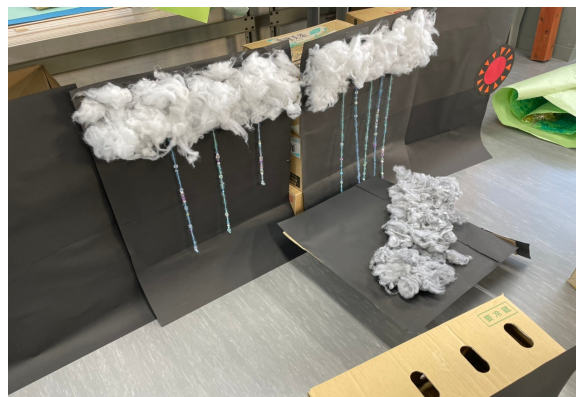
・割り箸に火をつけて、煙で表現する案が出た。実験でカセットコンロの火で割り箸につけることを試みたが、割り箸に火が付きづらく、付いても火傷の危険性があること、カセットコンロの火を使うことが危ないこと、換気がしづらいことかあげられ却下になる。代わりに、割り箸から線香へと変更し、カセットコンロはライターへと変更した。



- ・本番当日は、雲と海のセットの間に、線香を置く机を設置した。蛇腹にしたアルミホイルの上に、10数本を半分に折った線香を置き、ライターで火をつけて水蒸気を表現した。
- ・雫たちが水蒸気になって空に上がっていく様子を、毛糸にビーズを通して表現し、セットの後ろから毛糸を引っ張ることで上に上がっていく様子を表現した。
- ・綿雲は白い雲と、雫が雨となって落ちていくときの雨雲をイメージして綿に絵の具で黒く色付けた黒い雲を用意した。
- ・海のセットは2色の毛糸を束ねて画用紙に貼り付ける作業を繰り返して、波が立っているように見えるように立体感を意識して作成した。また、綿を散らすことで白波を表現し、ビーズを散らすことで、光の反射で光っているように見えるようにした。設置する際、並べた洗面器を土台にし、海のセットの裏にラップの芯を貼り付け、斜めに立てかけられるように工夫した。



【参考動画】歌「みずのたび」(<https://sp.nicovideo.jp/watch/sm8004125>)



▲(左)毛糸と綿で海を表現したセット

▲(右)雲と水蒸気の雫を表現したセット

④音楽の表現について(川崎)(西口)

使った楽器

・ピアノ ・シロフォン ・グロッケン ・カリンバ ・ウィンドチャイム ・スプリングドラム

・「しずくのぼうけん」という題材を作り上げる中で、より、子どもたちが楽しめるよう、楽器を使って、場面ごとの設定や雰囲気表現しようと思った。

・オープニングでは、ピアノとシロフォンを使った。ピアノが伴奏で、シロフォンがメロディーを演奏した。

・ゆうくんが探検しているシーンでは、ピアノとシロフォンを弾き、軽やかに楽しく歩いている様子を表現した。

・変身するシーンでは、カリンバとウィンドチャイムを使った。カリンバは音が柔らかく、しずくの世界に合うと思ったので選んだ。ウィンドチャイムは、演奏すると、音がキラキラと聞こえることや、「ドレミファソラシド」と順に音階があがるので「変身」というセリフにあっていると思った。

・所々でピアノを弾き、歩いている様子表現することで、場面の変化や子どもたち自身が息抜きになれる場所をつくった。また、カメラのセッティングや配置を入れ替えるなど移動の時間としても使った。

・子ども達に問いかけた後「正解」というセリフのシーンでは、ピアノで高い音2音を弾き、楽しい雰囲気になるように表現した。

・雷の音はスプリングドラムを使った。本物に近い音を出すことで、リアルさを表現した。

・エンディングでは、ピアノとグロッケンを使った。ピアノの伴奏をオープニングの時とあまり変えずに演奏することで、一つの作品としてまとまりを持たせた。

《音楽の楽譜》

1つ目エンディング楽譜 2つ目オープニング楽譜

M1 OPENING

ENDING

《練習風景》



〈ろ過〉(西口)

- ・吉柳先生にろ過の実験装置をお借りした。
- ・ろ過の実験を通して、雨が降った時に、子ども達の身近にある水溜まりの泥水が、ある方法を使うと、泥水から透明な水へきれいになることを伝えたいと思った。
- ・ろ過に使う石は、幼稚園の砂場から採取してきた。ろ過に使う石の大きさは4種類に分ける必要があったため、振るいにかいたり、手作業で分けたりしていった。石を大きさごとに分けた後、それぞれを水で洗い天日干しをして乾かした。



- ・初めて実験をした時、泥水が30秒程で透明に近い水になった。もう1度水を流すと途中で水が詰まり綺麗にはならなかった。そのため、もう一度水で洗い、天日干しにする必要があると考えた。
- ・石の量も限られており、何度も実験をすることが難しかった。それでも数少ない実験を重ねる内に、泥水がきれいな水になる時となりにくい時があることが分かった。本番では一発勝負で子どもたちに見てもらうため、できるだけ透明度のある水になるように、恒賀先生のアドバイスを受け、いくつかの方法を試していきながら準備を行った。その中で、綺麗にするためには炭を入れた方がいいという案がでた。。石の中に炭を少量混ぜて実験を行ってみた。すると透明度の高い色では無いものの、泥水より明らかに綺麗になっていたため、この方法で本番へ挑むことにした。
- ・本番の実験では、泥水が多少綺麗になったが、練習をしていた時ほどの透明度にはならなかった。
- ・この結果を受け、ろ過実験をする時は、きれいに石を洗い、しっかりと天日干しをし、石の層を今回の実験でした時よりも大きめに作ると、よりきれいな水になるのかもしれないと思った。



※九州大谷幼稚園にて採取



様々な大きさの石。

4.出演する上での工夫（永野）

（永野）オンラインでの開催となり、どうしても10秒ぐらいのタイムラグがあることを意識したり、子どもたちがタイムラグがあっても聞き取れる話すスピードを何回も練習した。また、画面が切り替わるタイミングでどう飛ぶかを出演者同士やカメラ担当の学生と話し合っただけで考えた。私たちは、大事な部分を人形を使って子どもたちに伝える方法を取っていたので、声の大きさや話すスピード、感情の表現を何度も何度もお互いに合わせたりした。特に大変だったのは、話すスピードが緊張だったりしてとても早くなってタイムラグがあると聞き取りづらいというアドバイスがあったので、ゆっくり話すことを心がけた。他の学生が、ゆっくり話した方がいい時は合図をしてくれたりなど工夫をして創り上げていった。また、しずくの世界に住んでいることを表現したかったので衣装をしずくらしさを表現するために考えた。

（中井）今回のオンライン発表で工夫した所はオンラインでの子ども達とのやり取りの仕方についてである。子ども達とやり取りを行う際にどうしても通信の数秒の遅れが生じたり、同時に喋ってしまうと片方が聞こえなかったりと、子ども達の声や反応を聞きつつ、言葉を伝えるのがとても大変だったので、どのぐらいの差が発生するのか、どのぐらいの声の大きさやスピードが聞き取りやすいのか、何度も先生方やメンバーと話し合い、練習を行った。水の不思議さをしずくの人形や自分達自身が登場し表現する際にどのようにしたら伝わりやすいか、自分の動きを工夫したり冒険してるような服装に着替え、棒読みにならないよう、気持ちを込めながら、届けることを意識した。また、他のメンバーと動きのタイミングを合わせることに意識を向け、発表に望んだ。本番ではアクシデントもありましたが、目線や手の仕草で合図を送り合いながら、子どもも私達も楽しみながら分かりやすく伝えられたのではないかなと思う。

5.結果・成果

水の不思議を、どのように表現することで、子ども達がより身近に感じる事ができたり、楽しいと思ってもらえるために、水の不思議を実際に見てもらい視覚を通して体験してもらったことができたと思うので良かった。

実験は、成功するかどうかはその時にないと分からなかったもので、上手くいかなかった時の対応にも対応出来るように練習したので、当日に行った実験の対応も臨機応変に出来たと思う。

リモートという事なので、カメラワークで酔わないように何度も練習したので、上手くいったように思える。（永野）

6.考察

・「うん」だけで返事が出来るときや、学生が言った言葉を繰り返すときが特に元気よく応えてくれている。→ 難しい問い掛けだと戸惑っている様子がみられたため、簡単な問い掛けの方が子ども達は理解しやすく、自信を持って返事をする事が出来ると考えられる。
(井手)

・自主的に動きを真似してくれている子や、物語に出てきた単語を繰り返し言う子の姿が見られる。→ 移動する際の音楽や「レッツゴー」等、繰り返し劇の中に登場するものは子ども達も覚えやすく、真似しやすいと考えられる。(井手)

7.《幼教子ども劇場（オンライン）》を通して

(井手) 今回の取り組みを通して、グループで話し合い、皆で様々な意見を出し合いながらひとつの作品を完成させていく、という貴重な経験をする事ができた。話し合いの中では、自分では思いつかないようなアイデアや意見が次々に出てきたことが非常に印象に残っており、複数人で話し合うことの大切さや、自分の視野の狭さを改めて実感した。今後は、様々な側面から物事を考え、柔軟な発想をすることができるように頑張りたい。



オンラインでの発表は、今回が初めての取り組みということもあり不安もあったが、この発表を通して、オンラインが持つ良さに気付く事ができた。カメラを切り替えることで場面展開が可能だったり、舞台上で使用すると目視することが難しいような小道具を使う事ができたりと、表現の幅が広がった発表会になったと思う。

(井手口)初のオンラインで行うということで、最初どのようにしたら良いのか分からず不安だった。しかし、同じグループの仲間たちと協力して、子どもたちとやり取りをしながら行えたのでオンラインだからこそ出来て楽しんでもらえていたので良かったと思った。また、私はカメラ担当をした。カメラでは、ジオラマを立体的に見せるように、どのような角度にしたら良いのかや子どもたちは画面越しで見るためにブレて画面酔いしないように持ち方をすることが難しかった。また、実際に水を流す場面では、セリフと合わせて行うことが難しかった。本番では、ジオラマの場面もあまりブレることなく行えたので良かったと

思った。しかし、人形とカメラが近かったためブレてしまったので距離感を工夫したら良かったと思った。

(片山) オンラインでの発表を通して画面で子ども達に対してどのようにすると分かりやすいのか考えるのが難しかった。しかしオンラインだからこそ出来ることもありとても良い発表が出来たと思う。私は発表のなかで人形を動かした。人形を動かすタイミングや動かし方はとても難しかった。動かすときには子ども達に人形の表情が分かるように意識して動かした。ゆうくんには裏にびっくりした顔も作っていたのでゆうくんがびっくりした様子は分かりやすかったと思う。

ジオラマや背景などの準備ではみんなと協力してアイデアを出し合って作る事が出来た。特にジオラマではどのようにすると雨が降って川に流れる様子が子ども達にみやすいのかよく考えて本物の川に近いものが出来たと思う。ジオラマが完成したときにはとてもすごいと感動した。

なかなか出来ない体験が出来てとても良かったと思う。このことを活かしてこれから保育者として頑張っていきたいと思った。

(永野) 新型コロナウイルスの影響により、開催ができるのか不安でしたが、オンラインでの開催ができることになり嬉しかった。ですが、オンラインはネット環境のトラブルがある可能性があったので、とても不安でしたが先生方がしっかり準備していただいたおかげで無事終わることが出来た。

私たちのチームは、テーマと内容を決めるのに時間が掛かり他のチームとの差が大きくなって、それにより焦ってしまったことがあった。テーマと内容が決まった後は、みんなで役割や担当がそれぞれあったことから協力して着々と進めていき、ジオラマや人形などクオリティの高いものが出来た。出演者としても大変だったけど、みんなと協力することの大変さや凄さなど経験することが出来て良かった。

子どもたちの反応をちゃんと見ることが出来なかったけど、変身のときに一緒にしてくれたりとても嬉しかった。新しいスタイルでの発表会をして今後の糧になった。



(中井) 幼教子ども劇場を通して自分達の身近にある水の不思議について、子ども達に伝えられたと思う。水がどこからやってくるのか、ジオラマや実験を通して仕組みについて表現が出来たと思う。ジオラマは空から雨を降らせる部分から山、家、川、海へと表現されており分かりやすく出来たのかなと感じた。例年と違うオンライン配信を通して、少ない人数の子ども達とやり取りをしながら行った事で、子ども達も実際に

に参加しながらこういう風に水が流れるんだ、と問いかけに応えながら参加出来ていたと思う。実際の本番の際にアクシデントは多々あったが、その場に応じて対応が出来たので結果、成功へと繋がったのではないかなと思う。

オンライン配信での子ども達とのやり取りも今まで経験した事が無かった為、子ども達の反応が何があるのかを予想しつつ流れを決め、本番でも子どもたちの声が上手く聞こえない事があった為予測しながら上手く行えていたと感じる。そのおかげでやり取りを行いながら水の不思議に触れつつ、なるほどと知り楽しみながら出来たのではないかと思う。

(松永) 幼教こども劇場全体を通し、ゼロから1を創り出す大変さや、1人ではなくグループでそれぞれ意見を出し合い創り出す面白さを学ぶことが出来た。

オンライン本番では、脚本と手元カメラで人形を動かすことを担当した。題材自体が少し難しいこともあり、易しい言葉で子どもたちが楽しめる物語を目指した。初めての脚本作成で、起承転結の起がなかなか決まらなかったり、どんな実験を行うのかに苦戦し、本番ギリギリまで添削にかかってしまった。そこで、グループ全体で物語の方向性について話し合う機会や場を増やし、中身を固めていきたいと思った。出来上がった台本を何度もグループの仲間にも添削してもらい意見を交換するなかで、少しずつ物語の形になっていったことにグループ活動の良さを実感した。

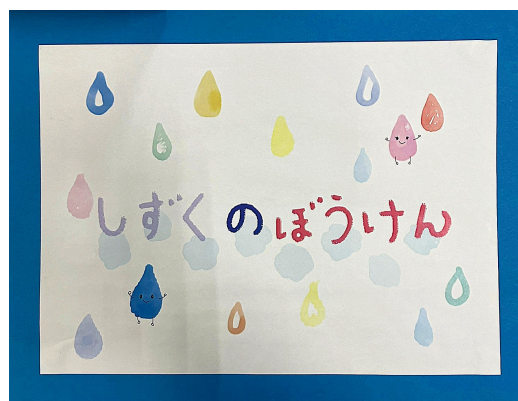
手元カメラで人形を動かす際に、あまり素早く動かすとブレて見づらいとアドバイスを受け、左右だけではなく、上下にも動きをつけ、ブレて画面酔いしないように注意を払った。また、出演者のセリフに合わせて人形に動かすことが難しく、ズレないようにすることに苦労した。モニター越しで見ている向こう側の子どもたちを意識しながら、ピントがズレていないか、動かすときに近づけすぎてはいないかに配慮した。

今回の活動を通して、表現の引き出しを増やせたり、トラブルに備えた準備の大切さを学ぶことが出来た。

(宮田) 私はオンライン表現活動を行い、話し合いを通して学ぶこともあることに気付く事が出来た。分からない事があり、1人で考えても良い案が出なかった。その時にグループのメンバーに聞き、自分一人では気づけなかったアイデアを生み出すことができた。

また、自分はオンライン表現活動でカメラの切り替えを担当した。カメラの切り替えでは、タイミングが重要視された。最初は、台詞とのタイミングが合わないときが多々あり、自分が思っていた以上にカメラの切り替えが難しかった。カメラを使って練習出来る日が限られているため、カメラの切り替えの練習を行う事がなかなか出来なかった。カメラが使えない時に、グループのメンバーにカメラを切り替えるタイミングを相談した。この台詞を言った時に切り替えるなどと話し合いを通して切り替えるタイミングを話していた。そして練習の時に切り替えるタイミングを画面越しで見てもらい、どうだったか聞いたりしていた。本番ではタイミングがズレてしまった部分もあったが、話し合いを行っていた為ズレが最小限に抑えることが出来たと思った。

このことを活かして、保育士になっても話し合いを通して学びながら、より良いものをつくれるようになりたいと思った。



(西口) 幼教子ども劇場を通して、10数人で1つのものを作り上げることの難しさを感じた。保育の現場に行ったら、運動会など子どもたちや周りの保育者と一緒に作り上げていく場面が多々あると思う。今回の経験から、どのような流れで進めるのか、どこまで進んでいるのか、など、細かな計画を立てて進めていく方がいいということをもっと感じた。1人だけ把握している人がいても周りに今の状況を伝えていなかったら、何をしたらいいのかすら分からないと感じる場面があった。そのため、途中経過の情報をメールなどを使って全員に伝えておくことで、メンバー同士が協力しやすい環境になるのではないかと考えた。次は今回の経験を生かして、工夫してやっていきたいと思う。また、雫の冒険の準備段階の時、本気で挑んでいるからこそぶつかることが多々あった。本気だからこそ意見のぶつかり合いがあったり何もやっていなさそうにしている人を見ると苛立ってしまうこともあった。けれど、みんなで本番を迎えることが出来よかったと思う。実験などで思ったようにはいかなかった部分もあったが、今までの最善を尽くせたものになったと感じる。子どもたちも反応を返してくれていたりと、本番が終わったあと、他のチームの人たちから「良かったよ」「すごかった」と言葉を貰えた時はとても嬉しかった。

子どもたちが水の不思議さについて少しでも興味を持ち、今回の劇を思い出してくれていたら嬉しいなと思う。

今回の取り組みを通して、やってみたいと思ったことに挑戦することの大切さを知った。失敗しても次の方法を探しまたやってみるという経験があるからこそ、自分の学びや様々なモノの素材や特性について知ることができるのだと学ぶことが出来た。

(石橋) 今回の幼教子ども劇場を通して、自分から見る視点や考え方と周囲から見る視点や考え方の違いについて学んだ。10人以上の意見が本当に1つの作品になるのか不安で自分の意見も誰かに届くのか怖かった。オンラインでの開催となり、当日失敗したりしないか等不安な点もあった。しかし、話し合っていく中で、人の意見を尊重する事の大切さや、自分の意見を伝える事で誰かの心に届くという経験を持つ事ができ、誰かに何かを伝えるについても学ぶ機会となった。保育者に自分たちはなるが、目上の方ともそしてその後入ってくる保育者とも言動を通して関わっていくと思う。その中で、1人1人の意見を参考にし、他の保育者や子ども達と1つの作品を完成させるという体験が沢山出来たら良いなと思った。今回友達から「凄かったよ！」や「めっちゃクオリティ高かった！」等のお褒めの言葉を頂き、達成感を感じた。これから出会う子ども達とも作品を制作する際、沢山の事を一緒に学んで達成感を感じたいと思った。